石森・貝コレクション

北川峻一

(1)

昭和44年4月28日、三国町東尋坊の石森正孝氏がなくなられた。福井県において、かって氏ほどの貝類収集家はなかったし、今後もおそらくはあるまい。

その理由の一は、氏はその一生、いわゆる職業というものを持たず、ただ貝類収集一すじに過ごしてこられたことである。仕事のあいまに趣味として貝を収集している人はかなりいる。また、商人をやとって貝を買い入れぼう大なコレクションを残したばあいもある。しかし、石森氏のように、貝収集そのものが生涯の仕事であった人はかつてなかったのである。その理由の二は、収集された貝の質・量のすばらしいことである。約4千4百種・12万個にのぼるぼう大な標本である。日本で採集できる貝類は、約5千5百種というから、その80%を集められたのである。

(2)

石森氏は、明治28年4月15日、美山町に生まれた。日大法学部学生の頃、江の島や銚子海岸ではじめて貝の美しさを知り、採集がはじまった。学生時代なかばにろく膜をわずらい、兵庫県須磨の療養所にはいった。その近くに、矢倉和三郎博士が貝博物館をひらいていた。石森氏はこの博物館によって大きな感動を受け、貝収集への情熱は、いよいよ本格的なものになっていったのであった。

大正8年、日大を卒業し、貝に近い仕事を求めて、銀座の御木本真珠店へつとめた。しかし、3年でやめ、以後、各地へ採集の旅がはじまるのである。昭和10年には沖縄へ行き、以後10年、そこに住みつき、そこを足場に、カラフト・エトロフ・ジャワ・スマトラ・北米・南米・オーストラリヤと十数か国への採集が続くのである。戦後は三国町東尋坊に居をかまえ、国内をのこすところなく採集してまわった。

その間、昭和17年、沖縄の那覇市付近のサンゴ礁から新種の貝を見つけ、「イシモリア・サンゴニナ」と名づけられることもあった。

晩年、体を悪くしてからは、収集のまとめともいうべき貝類図鑑出版を計画し、日夜、作成にあたっていたが、「貝類図鑑を出版するまで、あと4・5年は生きたかった。」ということばと、「「けっして貝をばらばらにするな。」という遺言を残して、44年4月28日に死去。74才であった。

親ゆずりの財産があるていどあったとはいえ、氏の貝収集一すじの一生は、まれに見る一生と言ってよいであろう。また氏の一生を支えられた美代子夫人（大正１４年結婚）の存在も忘れられぬものである。とくに戦後は、夫人は小学校の教員をされ、国内をあるきまわり半年以上も家をあける石森氏へ、せっせと送金され続けたのである。

かつて、氏は「私は変人でも奇人でもない。人間だれの心の奥にも、海岸をさまよい、美しい貝を拾いたいという願望はあるものだ。私はその願望にしたがって一生を送っただけのまことにしあわせな人間であった。」とのべられたことがある。１２万の貝を集められた氏の心情は、まことこの一言に尽きていると思うのである。

(3)

私（北川）は、石森氏の収集された１２万の貝を思うとき、その１２万の貝の背後に秘められた12万の採集の思い出に心ひかれるのである。やがて、石森貝博物館が、いずこかの地に建てられよう。人々は１２万の貝の前を足ばやに通り過ぎよう。しかし、１２万の１つ１つに石森氏の採集の思い出がまつわりついていることを思う人はありや、なしや──。

私も３０年にわたって化石採集を行なってきた。石森氏にはくらべうべくもないが、収集家のはしくれである。したがって、１つの標本の背後にひそむ採集の苦心・楽しみについてはよくわかるのである。

かつて、中学生の頃、私は「数万年前、日本には巨象が栄えていた。その化石が瀬戸内海底より上がってくる。」という記事に感動した。その感動は日ましに強烈となり、２０年後、ついに私は瀬戸内海底の象化石採集に向かった。広島県諸島の沖に舟をうかべた。漁夫をやとい、まる2日、海底をまさぐった。8月の末であった。瀬戸の海の夕焼けの美しさ。象の化石はなかなか網にかかろうとはしない。漁夫は私をばかにした。「あんたはよっぽどひま人だのう。象の化石なんか引き上げてどうするんですか。」私は腹を立て、漁夫あいてに化石・古生物学の講義を始め、ついに漁夫は「うん、うん。」とうなずきはじめてきた。釣った魚を舟の上で焼いて食った。2日めの夕方ついに一片の肢骨化石が網にかかったのであった。──じつに楽しかった。しかし、私が引きあげた化石など、標本屋で買えば5百円ぐらいのものであろう。あの舟の上での楽しかった２日間の思い出は年を経るにしたがってますます強烈に輝いてくるのである。

また、私たち足羽第一中学地学クラブは、昭和４１年８月、美山町小和清水から、ジユラ紀では日本ではじめての陸上爬虫類の化石を発見した。昭和３１年～４１年にかけ、地学クラブは１８０回、のべ約9百人で小和清水での採集を行なった。そのすべては大学ノート２０冊にわたる「地学クラブ日誌」に記録してある。私にとって爬虫類化石はべつに問題ではない。この「地学クラブ日

誌」　「思い出」こそが価値あるものなのだ。

小和清水に生徒とともにキャンプもした。夜半、私はねむられぬままに、化石の出るがけの下へ行った。足羽川の川音だけが生きている。私は自分自身ががけの一部になったような気になるのであった。そして、テントの中でようやくねむりについた私は、だれかが私の口をなめているのに気づいてはねおきた。捨てられた小犬が、私の口をなめていた。その捨て犬は、それから8年間我が家のペットとして我々を楽しませてくれたのであった。

私の集めた7万の化石には7万の思い出がまつわりついている。私は7万の化石のすべてを、今、失ってもすこしも惜しいとは思わない。7万の化石はなくなっても、7万の採集の思い出は、ぜったいに消えることなく、日一日と強烈になっていくからである。

(4)

石森氏の12万の貝には、12万の採集の思い出がある。しかし、その思い出は、石森氏の死とともに消え去った。

今、12万の貝は、美代子夫人が、ひっそりと守り続けておられる。福井県民には石森氏に対してなさねばならぬ仕事が2つある。1つは、石森貝博物館を建立すること。いま1つは、石森氏の採集の思い出を、夫人の口を借りてさぐり出し、文字にして広く人々に知らせることである。

足羽第一中学校　教諭